



あごら

第三号

- あごらの会 -

まえがき

あごら誌三号をお届けいたします。この号も「あごらの集い」でご一緒する教友方の信仰エッセイを寄稿していただき、神の祝福を分かち合えることは嬉しいことです。

編集に関わった一人として、今号は二〇〇七年十一月、神に召された教友の竹川洋三兄のメモリアル号という思いが私自身にはありました。寄稿していただいた教友方にはその旨はお伝えしませんでした。が、今も私の生活の中では竹川兄と想念の世界で語り合っています。

洋三兄との出会いは、かれが大学二年生の頃で、その後、疎遠になっていましたが、フリーの伝道者に成られてから親しく語り合い信仰の分かちあいをしてまいりましたが、発病後彼は、自分の死という現実と直接向き合って聖書を読み始めたとき、彼自身の聖書解釈に大きな変化が起りました。それについてここは語る場ではありませんが、大切なことなので簡潔に語り合ってきたと思います。

それは、彼にとって「聖書」が「書かれたもの」から「神のことば」になったということです。それは「聖書テキスト」が「ただの文字から再現実化された」ということであり、聖書テキストが常に持っている疎隔の条件をのりこえて彼自身の生の現場で、生きた「神のことばの出来事」となったということです。つまり「私自身のことばとなった」のです。彼は、そのとき「死ぬことは〈前進〉であることに開眼した。この告白が彼の『前進』（ピリピ人への手紙一章二十一

節)」であり、『その日、その日。一日一日。夕があり朝になった』でした。(「前進」冊子・八十七ページ以下)

この一点を、わたしは聖書が持つ「初源的現実(靈的現実)」を自身の「初源的体験(靈的体験)」と成らせていただかなければ、と願いつづけているのです。ここが欠落するとき聖書はただの一つの宗教的なテキストになってしまおうでしょう。あごらの集いではここを問いつづけて、ご一緒に救道していきたいと願っています。

最後に、みなさまの平安をお祈りしますと共に、故・竹川洋三さん、ご遺族のみなさまの平安を合わせてお祈り申し上げます。

尚、この冊子の印字と編集作業をご多忙の中、今回も惜しむことなくご奉仕してくださいましたお世話係の小野恵子さんに感謝いたします。また、この冊子作りにご協力いただいた皆様にも感謝いたします。ありがとうございます。ありがとうございました。

合掌

二〇〇九年四月二十八日

松下 昌義

伝道者パウロの願ひ（一）

— 靈の賜物をいくらかでも分け与えて力になりたい —

松下 昌義

パウロは熱烈な求道者、また真摯な神学者でした。それだからこそ彼は伝道者としてその一生を全うすることで宗教信仰の何たるかを証示したのです。

キリスト者に回心する以前のパウロはユダヤ教ファリサイ派の筋金入りの律法主義者でした。律法主義者とは、旧約聖書とその敷衍解釈された神の律法（ゲマラ・ミシュナー）を正しく守り行う者だけが救われるのだと信じる神殿祭祀に基づく信仰人のことです。ですから、律法の義を完全に守り行う「義人」など本当はだれ一人なく、すべての者は「罪人」であり、その罪人がイエスの十字架の贖いの死によつてどの人も赦され救われると教える初期キリスト教とその信仰は、当時のパウロにとつて神の冒瀆（神の契約の言葉である律法と神殿祭義の否定）であると断定し、彼はキリスト者の撲滅にその全精力を傾けました。紀元三十年代初めのころです。そのときのパウロの迫害の様子を使徒言行録の著者ルカは次のように記しています。

…サウロ（パウロのユダヤ名）はステパノを殺すことに賛成していた。…サウロは、教会を根絶しようとして、家という家に押し入り、男や女をひっぱっていつて、牢獄にわたしたのである。

(使徒言行録八章一節〜三節)

さて、エルサレムに於ける迫害ののち、なおもサウロは、キリスト者たちを脅迫し殺害しようと意気込んでいた。そこで：ダマスコの街のキリスト教徒を見つけ次第、男女の区別なく縛りあげ、引いて来るため(ダマスコへ一隊を引き連れ出発して行った) (使徒言行録九章一節以下)

(以上は荒井献訳による)

その途上、彼は復活のイエスの顕現という不思議な体験に遭遇し、自分の律法主義的信仰を打ち砕かれると同時に自分(人間)を生かす真の命の何であるかに開眼したのです。このことについてパウロは次のようにガラテヤの教会の信徒に送った手紙に記しています。

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようなふうなまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、私を母の体内にあるときから選び分け、恵みによって召し出して下さった神が、御心のままに、キリストをわたしの内に啓示し、その福音を異邦人(ユダヤ人以外の人)に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐに血肉(親族・友人)に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上ってわたしより先の使徒として召された人達のもとへも行くこともせず、シリヤの砂漠に退いて、再びダマスコに戻ったのです。(ガラテヤの信徒への手紙一章十三節〜十七節)

ユダヤ教律法主義信仰の呪縛からパウロを開放させ、さらに存在の根源、命の根拠、生きる本当の根柢に開眼させたものは何だったのでしようか。彼は先に紹介したとおりガラテヤの信徒達に送った手紙に「私を母の体内にあるときから選び分け、恵みによつて召し出してくださった神が、御心のままに、キリストを私の内に啓示し、その福音を異邦人（ユダヤ人以外の人）に告げ知らせるようになされた」、と自身の神による召命をハッキリ語っています。特に注目すべき一点は「神が御心のままに、キリストを私の内に啓示してくださった」ということです。

私は今、パウロの信仰の構造を神学的に解明し論じようと考えてはいません。ここで皆様と分かち合いたいと願うことは、「何がパウロをその信仰へ導き」・「パウロは何に開眼し」・それ故に「パウロは私たちに何を証示したのか」というその（何）を私なりに再度確認すること、私自身の求道と伝道者としての在り方、さらに危機的状況にある今日の教会の在り方等をご一緒に省みることができたら、と願っています。

○ パウロは何に開眼したのか

パウロは「神は、キリストをわたしの内に啓示してください」と言います。が、その意味内容は何なのでしょう。パウロが言う「キリスト」とは「復活のキリスト」の（コト）であつて、歴史的なイエスを直接指してはいません。（コリントⅡ五・十六）では、「復活のキリスト」とは何を意味しているか、あえて申しますと（永遠的且つ創造的な命のたぎりとしてのコト）だと言えます。（コト）とは（モノ）ではありません。（モノ）とは個物であつて客観的に対象的に見

えるものです。しかし（コト）とは（動的な出来コト）であつて、それ自体は対象化、または客体化出来ず、見たり、掴んだり、また言葉で捉えることも出来ません。例えば、「命」とは（コト）であつて、誰も命を（モノ）として客観的に提出出来ません。

★「キリスト」とは、固有名詞のように用いられていますが、職能または働きを表す普通名詞であり、わたしは動名詞的にも理解し用いています。例えば、「大いなる命」とか「コト」とか。また「イエスはキリストを生きた」等。

「物象化的錯視」という難い言葉で「モノとコト」の問題をとりあげた思想家（広松渉）がいます。その方は（コト）を見える（モノ）に還元して捉え理解しようとするのは「錯視」つまり間違つた見方であり、それでは物事の眞実は見えません！とおっしゃるのです。これはすべてを（モノ化）してしまう近代合理主義を批判しておられるのですが、私たちも、神とか救いとか罪とか聖書等を（モノ）として捉え理解しようとする誤りを犯してはいないでしょうか。例えば「神」を（モノ）化して、地の果て、天の何処かに人間の能力を延長した極致の知恵と力と清さをもつた超人的なお方（人間が描く理想の姿）が（モノ）として存在していらつしやる）ように想像し、それを対象化、客体化したモノを「全能の神」としたのと同じです。——ヨーロッパ的キリスト教会はそのような（神）を教えて来なかつたとは言えない面があります——したがつて、一方、物象化的錯視にまどわされた近代人は（モノ）化され対象化される（神）など存在しない、そのような神は夢幻であると、笑い飛ばした。こうした無神論を生み出した原因は、ヨーロッパ的キ

リスト教にあるのではないかと思いません。

また、〈聖書の文字〉をモノ化して、それ自体直接に〈神の言葉（文字）〉であると信じ、その文字を振りかざすことで、あたかも〈神〉を示しているように思い、それを〈聖書の信仰〉だとする愚かを犯してしまいます。そのような人にイエスは言われた。

あなたたちは聖書の中に永遠の命がある（持っている）と思つて、聖書を調べている。だが、聖書はわたし（キリスト・大いなる命）を証示するものである。（ヨハネ五・三十九）

聖書は大いなる命を証示する（コト）なのであつて、大いなる命それ自体の（モノ）ではありません。（キリスト（大いなる命））や聖書を（モノ）としてしまい「聖書！聖書！」と振りかざす信仰は誤りの「聖書主義」に落ち込み、ときとして聖書原理主義を生み出します。狂信に落ち込んでしまいます。それは宗教の〈魔〉の一つです。イエスはそれを戒められた。ちなみに、この〈宗教信仰の魔〉を霊的に見抜いていた一人がマイスター・エックハルト（一二六〇〜一三二八）です。彼は「神を知るために神を捨てよ！」「信仰を捨てるのが信仰である！」と証示しました。しかし、彼は当時のローマ・カトリック教会から「異端」として破門されました。

また、ジョルダン・ブルーノ（一五四八〜一六〇〇）が異端として火刑に処せられた事件は周知のことです。彼は哲学者でありドミニコ会の祭司であり、ルター派に改宗した熱心な求道者でした。しかし、宇宙を有限なものとする伝統的な天動説を批判し宇宙は無限であり、コペルニクス的な太陽を中心とする体系が複数存在するとの考え、つまり地動説の見解を発表したばかり

に、聖書の天動説に反するという当時のキリスト教会による異端審問の末、無残な火刑に処せられたのです。その後、ガリレーオ・ガリレイ（一五六四〜一六四二・物理学者、天文学者、数学者）も地動説を発表したばかりに異端審問にかけられ異端聖絶を強制され、「それでも地球は動く」と眩きながら教会の聖書的な主張を受け入れた事件も周知のとおりです。しかし、ガリレイの名誉回復がなされたのは、なんと三五〇年後の二十一世紀に入る直前の一九九二年十月であったことを忘れてはなりません。

政治的なイデオロギーや宗教的な妄信による独善が権力組織に成ったとき、真摯な求道者の大方は、抹殺され、愚かな人々はその権力に迎合します。律法による神殿体制の当時のユダヤ教正統組織宗教によつてイエスは十字架刑で無残に惨殺されたことを忘れてはなりません。

★「証示」とは、「さとりしめす」という意味で用いています。

要するに、以上のような意味で「物象化的錯視」ということに注目するならば、それはキリスト教という「宗教」は、今日徹底的な自己批判（厳密には「自己否定」）をしなければならぬと思う。私自身はそのような視点からささやかながら伝道という教会の現場で自分自身のキリスト教信仰を問い続けてきました。しかし、こうした私の視点に共感してくださる牧師と呼ばれる方に、私の知る限り一部の神学者をのぞいて今日までお出会いはありません。むしろ、そのような私のキリスト教理解に対して（異端的である）と警戒または否定し、初めから対話すら出来ないことは哀しいことです。しかしその人達が「自分は（正統的なキリスト教）である」と

いうその「正統性（ヨーロッパ的キリスト教）の根本が揺らぎ問い直されている」のが現代のキリスト教会の歴史的現実なのだということを、彼らは自覚していらつしやらないのは残念なことです。

「私のキリスト教理解が正しく、それに共感してくだらない方が間違いです」と言っているのではなく、そうではなく神の大いなる命の営みの世界は（非閉鎖的で未完結）な（創造的な命のたぎりとしてのコト）であつて、それは、およそ人間の認識を超絶している（ただただ不思議のコトであつて、それは、およそ人間の認識を超絶している（ただただ不思議のコトだ！）という意味に於いて、「どちらが正しいか」などと決めつけることは出来ない畏敬すべき絶対の（無）であるという視点から申し上げているのです。

この創造的、且つ霊的な命のたぎりの世界についてパウロは次のように告白しました。

ああ！なんと深いことか。神の富と智慧と知識は！神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせようか。「いつたいだれが神の心を知っていたであろうか！だれがまず神に与えて、その報いを受けるであろうか！すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かつている。

栄光が神に永遠にあるように」ローマ十一・三十三〜三十六

「これこそが正統である！」とか「これが」聖書的である！」などというコトはないのです。さらに、私たちが「これだけは守らなければならぬ！」と思ひ込むモノなど何もないのです。それらは所詮は人間又はその人の信念であつて、パウロの場合、その律法的神信仰の信念を、大

いなる命（キリスト）によって撃破され無化されたのです。

大切なことは、「どちらが正しいか」と互いに自己主張（宗教的エゴ）の応酬をするのではなく、極め尽くすことが出来ない神の非閉鎖的、未完結な大いなる霊的命に自己を撃破され無化されることです。徹底した自己否定に於いて自己を立ち上げることが欠いたままで、定められた教義の枠、また（単なる聖書の文字）に基づいて神を理解することを「正統的・聖書的」と言うなら、それは自我の枠で神を閉鎖的且つ完結的に限定し理解したにすぎないのではないのでしょうか。それは自己主義であり、自己による信念信仰にほかなりません。

イエスは律法（聖書文字）で神を限定した当時のユダヤ教を厳しく批判なされた。それは律法（聖書）主義者の不道徳や求道の不熱心を批判なされたのではない。彼らは道徳的で熱心な信仰人であった。だが、彼らの熱心は、パウロ的に言えば、神の義ではなく、聖書（神・信仰）を自分の義で限定し、神の義に従わなかった（徹底的な自己否定がなかった）からです。（ローマ十・一〜四）

自分の義で神を限定する律法主義は（霊的コト）を（物象的モノ化）する一種の合理主義であり、常識主義であると言えましょう。これについては後で述べますが、イエスとユダヤ教の誠実な教師ニコデモとの対話はその典型の一つだと言えます。（ヨハネ福音書三・一〜十二）

私はただ神の創造的な大いなる命のたぎりに促され、これからもイエス不肖の弟子の一人として求道の道を愚直に歩ませていただきたいと願っています。そして、ご一緒できる方がおいでなら、

求道を分かち合いたいと思います。それが何処であっても、そこに大いなる命（キリスト）を靈的に自覚する信仰によつて自然に生まれるのがエクレシヤ（教会）ではないでしょうか。

二人また三人が、わたしの名によつて（の中へ）集まるところには、わたしもそのただ中に有る。（マタイ十八・二十）

神の言葉であると教えられて信ずる聖典（聖書文字）があり、その文字によつて構築され正統化された教義があり、その教義に基づきそれを信じる人達が作った組織集団が定型化された祭儀（礼拝）を行つてゐるのが「教会」と称されるようになってしまひ、その組織を維持し、より強力に拡大することのみに関心を抱くようになった宗教集団は、すくなくとも「キリスト教会」の場合、はたしてそれが本来の教会（エクレシヤ）と言えるのか？物象化した組織、つまり（モノ）としての「教会」や「宗教としてのキリスト教」を守ろうとするあまり、（コトとしての靈性）を欠落してしまつてはいないか、と反省します。皆様はどのように思われますか。

★ 本来のエクレシヤ（教会）の（コト）としての在り方をマタイ十八・二十。エフェソ一・二十三は示唆している。これについては後で一緒に考えましょう。

今の私の歩みは、所謂「^{かっこ}」付きの「宗教」や「キリスト教」というものを突き抜けたら、そこに（キリスト（大いなる命））を全身で証示するイエスさまが立つておられた、そのイエスの

一人の弟子として与えられた日々を、そのままの自分で淡々と過ごしたいと思っています。

話が横道に入ってしまった。本論に戻ります。要するにパウロが「キリスト」と称するのは「復活のキリスト」であり、それは「永遠的且つ創造的な命のたぎり」としての「コト」としての命、それを聖書は「霊・聖霊・キリストの霊」（ロマ八・六、十一）と称しています。イエスは、その「コト」を「神の支配」と証示なされた。したがって、歴史的な個体としてのイエスが一度死んだが再び生き返り復活したのが「キリスト」ではありません。このところが伝統的なキリスト論の中心点となり、古代の教会ではさまざまに論議され、その結果一応歴史的な経緯を踏まえて最終的に教会会議はニケア信条というキリスト論の基本的立場を確立し、私たちが聞いているところの「三位一体」の教理（神とイエス・キリスト・聖霊との関係）を承認した。五八九年（第三回トリード会議）です。

その教義に基づいて宗教と政治権力を掌握したキリスト教会は正統か異端かを、神の名により判別し、その地位や立場に関係なく多くの真摯な求道人を異端者として凄惨な処刑（火あぶりの刑など）を行ったという中世ヨーロッパの教会の姿は、私たちのよく知るところです。その異端刈りの延長線上に「魔女刈り」も行われたのです。

その後歴史的にはマルチン・ルター（一四八三〜一五四六）等による宗教改革運動が起こりプロテスタント・キリスト教会がヨーロッパに形成され現代に至っています。

しかし、現代と言う時代状況は、キリスト教会の基本信条としてきた、三位一体論（神につい

て・イエス・キリストについて・聖霊について)が、根本から問い直されているのです。と言うよりも、端的に言うなら、ヨーロッパ的キリスト教そのものが、決して普遍的な真理としての「宗教」ではないというキリスト教絶対性、排他的独善主義的キリスト教とその教会の在り方が、当のヨーロッパのキリスト教の内部からも噴出してきています。例えば、それまでキリスト教唯一絶対主義をもつて「教会外に救いなし」と主張していたローマ・カトリック教会が一九六二年〜一九六五年に「第二バチカン総会議」を開催し、「原始宗教、仏教、ヒンドウ教、イスラム教の靈的価値を認める」宣言をしました。これはまさにヨーロッパ中心主義の時代の終焉宣言でもあります。さらに、学問的にはドイツの神学者、宗教社会学者、哲学者であったエルンスト・トレルチ(一八六五〜一九二三)はキリスト教の絶対性を確認する作業を進めるなかで皮肉にも、キリスト教の相対性を歴史学的、神学的に確認するに至り、個人に於ける信仰の絶対性と宗教としての相対性の関係を如何に結び付けるかという現代的問題を提起する端著を開くことになった、ということはお周知のとおりです。要するにヨーロッパ中心主義とそのキリスト教は崩壊し、キリスト教も地球の片隅であるヨーロッパという文化の一つの産物にすぎない宗教として相対化されたのです。これらについては研究者でもない私が語るより、専門書などは是非一読されることをお勧めいたします。

しかし、先にも述べましたが、我が国に於けるプロテスタント系キリスト教会は、牧師も含め現代状況の中で苦悩はしていますが、一部の神学者をのぞいてその苦悩の根源に目を向けるだけの問題意識は牧師も含めて一般的にお持ちでないように思うのです。むしろ日々厳しい現実生活の中で誠実に求道している信徒の方々が、「このままでは、教会は、結婚式教会・葬式教会

になつてしまふのではないか」と、非教会化する教会の現状を憂いておられるのを身近に見聞きします。

★「公会議」とは、カトリック教会に於いて教皇が全世界の司教を招集・主宰して、教会全般の在り方を討議決定する会議です。この会議の最初は使徒言行録十五章ある「エルサレム使徒会議」です。第二十一回公会議は一九六二〜六五年に行われたヴァチカン公会議で、そこで二十一世紀に於ける教会の在り方が決定されました。このようにカトリック教会はその時代に教会として正しく対応出来る教義判定、教会行政上の決定を、真剣に進めてきたようです。その是非はともかく、聖書文字原理主義的になりがちなプロテスタント教会にはない柔軟性があるように思います。今まで開かれた公会議は二十一回です。

パウロが回心したのは「ただイエスが幻の中で現れた」というモノ的な異常現象の体験（使徒言行録九・一〜十九、二十二・三〜二十一、二十六・十二〜十八）によるものではありません。もし、そのようなことであれば、その出来事が本当に起こったのか、否かという無意味な議論が展開するだけです。問題は、このようなキリスト顕現事件がパウロの内に何をもたらしたか、ということであつて、事件そのものが本当に起こったか否かではないのです。ちなみに、使徒言行録に述べられてゐるキリスト顕現事件について、パウロ自身は、その手紙の中で一言も語っていません。そもそも使徒言行録はルカという人物がパウロの死後四十年以上経ってから記されたものであつて、研究者は記されたとおりの事が起こったとは受けとめてはいないようです。とにかく繰り返しに

なりますが、宗教的な個人の回心というような内面的な出来事の根拠を、外面的な現象（モノ）にだけ求めることは、先にも申しましたとおり「見た！見ない！本当だ！嘘だ！単なる主観的な幻想だ！等々」の無意味で不毛な論議になるだけです。

宗教的な真実をこの世の見える出来事（コト）に根拠を求めるとき、必ずその宗教性は消えてなくなり、歪んだものになります。例えば世間で言われる単なる御利益宗教や不思議体験信仰になってしまいます。それはエゴイズムとニヒリズムの落とし穴に落ち込むだけです。

この世に於ける「体験」、特に宗教的な不思議体験のいかなるものも、それ自体としては統一的な体系（理屈）を成すものではありません。それは、知識や言語以前の根源的な命や力、特にパウロのキリスト顕現体験は命の根源（上から）の言わば霊的な啓示（体験）だったので。ですからパウロは彼自身その手紙で直接告白しているように「神がキリスト（永遠的且つ創造的な命のたぎり）を私の内に啓示された」のであり、それによって彼は「私にとって生きることはキリストなのだ！」（フィリピ一章二十一節）と自己（人間）の存在の根源的命、根拠としての命に開眼し告白させられたのです。その意味で、不思議体験を振りかざさないパウロの宗教理解はとても健全だと言えます。

★「啓示」とは、究極的真実が神的靈的に上から（超越者・神から）一方的に、覆われていた覆いを取り除いて示される出来事（コト）です。

このパウロの告白の内容は、(キリストとは私が生きているという全てのコトです)という意味であり、もつと的確に言えば「キリストこそ私が私として生きている営みの根源だ!」という事、そして更に言い換えれば、それは「私が私によって生きているのではなく、私が生きていることはキリスト(大いなる命)で、生きているということだ!」という自己の本当の命の発見であり、その大いなる命を我が内に自覚した驚愕・驚嘆の叫びだと言えましょう。

ですからパウロは次のように歓喜絶叫した。ガラテヤ二章二十節を私なりに意識しますと次のようになります。先ず本文を掲げ、次に意訳を記します。

〔日本語聖書本文―共同訳聖書―〕

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられる(クリスト・エン)のです。

〔意訳〕

ああ!なんとということであろうか!私が私を生かしていると確信していたが、本当はそうではなかったのだ!私が、私に配慮し、私を生かし生きる前に、キリスト(永遠的且つ創造的な命のたぎり)が私を生かし、私たらしめているその命を私は生きていたのだ。今もそうであり、未来永劫に私を生かしつつけてくださるのだ!そのような大いなる命に生かされている自分自身に全く気づかず、律法(聖書の文字)を守り行うことによつて、私を私として生かさねばならぬと自ら力んでいた私は、なんと愚かな生きかたをしていたことか。キリスト(大いなる命)こそ私の

全人格的生の主体なのである。

と言うことは、パウロの「復活のキリスト」の顕現体験とは、復活のイエスの姿に遭遇したと見たとか、その声を聞いたとか、十字架上で死んだイエスが死なずに生きているとか、言うならば週刊誌の三面記事的な話ではなく、パウロに於いては先に紹介したとおり「私を母の体内にあるときから選び分け、恵みによって召しだしてくださった神が御こころのままに、キリストを私の内に啓示（あらわに）し、その福音を異邦人に告げ知らされるようにされた」出来事だったのです。（ガラテヤ一・十三）

つまり「復活のキリスト」を私の内に啓示（あらわに）されたとは、パウロにとって本当の自己自身の発見であると同時に、自己の生き方への強力な動因となったのです。ですから、彼は神の啓示を受け、それまでの自己自身についての自覚が大回転したのです。彼は次のように告白しました。

誰でもキリストの内にある（エン・クリストオ）ならば、新しい創造である。古いものは過ぎ去った。見よ（イドウ・忘れるな！）新しく成った。（コリントⅡ五・十七）

パウロは「改心」したわけではありません。「回心」したのです。改心は悪かったところを悔い改めることですが、聖書が言う「回心」とは、神との関係に於いて人間が（本来の姿に帰ること）です。ですから「回」と言う漢字は「元に帰る」とも読む意味に於いて、まさに聖書の言う

（メタノイア）（悔い改め）の意味を表現していると云えます。

パウロは神との関係に於ける本来の自分の存在（エン・クリスト）に開眼したのです。律法（聖書の教え）を正しく守るか否かという以前に、人は元始から神（創造的な大いなる命）に包まれ、支えられ、必要なさまざまなものを賜物として受けて生かされている、という自己存在の奥義に開眼したのです。これが（キリスト顕現体験による啓示の内容）だったのです。これはパウロにとつて晴天の霹靂でした。そのとき彼は（新しい自分自身の誕生）即ち「新しい創造である」と知った。つまり彼は律法遵守に生きる自己が死に（関係がなくなり）神の恵みの靈に生かされる自己を発見したのです。

ですから「見よ！新しくなった」と叫んだ。「見よ！（イドウ）」とは、「忘れることなかれ！」「お前自身（人間）がどれほど有り難い存在であるか忘れてはならぬぞ！」という意味です。

彼は、自己の生（命）の本当の姿に気づかないままで、自己自身の努力により神の律法（聖書）の文字を守ることで自己を生かさねばと努力し、思い煩い、葛藤しつつ克己する生き方を（信仰）または（宗教的な生き方だ）と思い込んでいました。このような自分の肉的努力の求道に「肉」の虚しさを見ると同時に、神に対する「自己の罪」をも見たのです。これは正に靈的開眼であります。「靈は神の深みまで明らかに示してくださいと、隠れていた神秘としての神の智慧」を開示されたのです。（コリント一・七・十）

そのとき、彼は「古い自己の生き方は過ぎ去った」事を実感し、同時に「文字（律法・肉の思

い)は人を(律法的生に縛りつけ、靈性を奪い)殺す。しかし、靈(の働き)は人を(本来の人間として)生かす(創造する)」と告白したのです。これこそが「回心」なのではないでしょうか。(コリントⅡ三・六)

結局、パウロはキリストの顕現体験によって何に開眼したのでしようか。それは(人間存在(自己自身)の本当の姿)に開眼したのです。もう少し厳密に言うならば(神(大いなる命)に生かされている人間存在(自己自身)の真実の構造)に気づいたのです。

まさにどの人も初めから、否、この世に生まれる以前から、そしてこの世を去っても人の命は永久に神の慈愛に包まれ、支えられ生かされつづける(エン・クリストオ)という自己の存在の神秘にハッキリと開眼したのです。死んでも生きても神の中(エン・クリストオ)という自己の存在に開眼させられたのです。

ここで、この項の結論として、自己(人間)の本当の命の根源に開眼した伝道者パウロの歓喜、そして慰と希望の証しに、深く耳を傾けてみましょう。

今や、キリスト・イエスに結ばれて(エン・クリストオ)いる者は、断罪されることはありません。なぜなら、靈と共に与えられたキリスト・イエスに於ける大いなる命があなたを罪と死との力から開放したのです。

肉(サルクス・自我中心的な智慧)に従って生きる者は肉に属する事を求め、靈(プネイマー・神の靈に導かれる智慧)に従って歩む者は、靈に属する事を求めます。肉の願いは死であり、

靈の願いは命と平安です。なぜなら、肉への志向は神への敵対です。神の教えに従っていないからです。否、従い得ないので。肉の支配力の中にある者は、神に喜ばれることはありません。神の靈があなたがたの内に住みついている（クリストス・エン）かぎり、あなたがたは、肉ではなく靈の支配力の中にあるのです。もし、クリストの靈を持たないならば、その人はクリストのものではありません。クリストがあなたがたの内におられる（クリストス・エン）ならば、体は罪によつて死んでいても靈は神の義（生かす力）の働きにより命となっています。

イエスを死者のなかから復活させた方は、あなた方の内に住んでいる（クリストス・エン）なら、あなた方の内に住んでいるその靈によつてあなたは死ぬはずの体をも生かしてください。神の靈によつて導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたが今受けている靈は、あなたがたを再び不安の中に拘束する靈ではなく、神の子とする身分をつくる靈を受けたのです。この靈によつて神を「父よ！」と呼ぶのです。この靈こそ、私たちが神の子であることを、私たちの靈と一緒に証しして下さいます。…現在の苦しみは、私たちに授けられる栄光に比べれば、比べものにならないと私は思います。…私たちがこの望みによつて救われたのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。…未だ見ていないものを望むなら、私たちは、それに向かつて、体をのびし落ちついて待ち望むのです。同様に、靈も私たちの弱さを支え助けてくださいます。私たちがどのように祈ればふさわしいのか知りませんが、靈ご自身が、言葉に表せない呻き（集められた力の爆発）をもつて弱い私たちを執り成してくださいます。…靈は神の御心にしたがつて信仰の人のために神の御前に嘆願してくださいます。

神を愛する者たち、つまり、目的のために召されている者たちは、万事が益となるように共に

働くということを私は知っています。…では、このすべてについて何と言うべきでしょうか。もし神が味方であるからには、だれが私たちに敵対できますか。…だれが私たちを罪に定める（神の栄光からとりさる）事ができましようか。

復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座って、私たちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛から私たちを引き離すことができるでしょう。試練か、困窮か、飢えか、裸か、危難か、剣か。…それにもかかわらず、私たちを愛して下さったおかたの力により勝利するのである。私たちは確信しています。死も、命も、天使も、支配する者も、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、高いところにいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことは出来ないのです。（ローマ八・一〜三十九 ★ 一部、E・ゲーゼマンのロマ書の訳文を混入しました。また紙面の都合で、一部省略しました。）

それにしても、「キリスト（大いなる命）の靈に開眼しないまま、キリスト教の教義や聖書の文字に寄りかかすることで、自分はキリスト者であると思ひ込んでいる人がいれば、その人は、キリストのものではありません」というパウロの言葉は厳しいというより、（これほどの、大いなる命が私たちの存在を無条件に保証し、保持し、完成すべく共に働いておられる）のに、その自己の生の真実に開眼しないとは残念だ！開眼させられる信仰人として生きてください！と涙して祈る伝道者（パウロの願ひのこころ）が伝わってきます。

★「肉の思い」とは、人間の知力、情力、意志力、体力だけに頼って生きる生き方のことを意味しています。「肉の思い」は葛藤と偽善と虚無に包まれるだけです。

★「霊の思い」とは、自分（人間）が生きている、又は存在している命の営みが、上記「肉」の力だけでなく、大いなる命（超越者・神・霊）の働きと支えとによって成り立っているということを直接体験的に悟っていることです。したがって「清い思いが霊の思い」ということではなく（そのままの自分で生かしていただけるのだ！）と深く自覚する思いが「霊の思い」なのだと言えます。そこでは（葛藤も不安も）そのまま受入れることができる大安心がある。

○ 何がパウロを開眼へ導いたのか

求道者パウロが最後に到達した世界は先に述べたとおり「（私が）生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト（大いなる命）が私の内で生きているのです」（ガラテヤ二・二十）ということです。「キリストが私の内に生きている（クリストス・エン）とは（私の営みがキリストの働き（大いなる命の働き）に基づいて成り立っている）」ということですから、彼は「（私が）生きているということはキリスト（大いなる命が生きているということですよ」と言った。（フィリピ一・二十一）このように自己の存在の真実に開眼せしめた働きこそ、「キリストを私の内に啓示（あらわに）したという霊的体験だったのです。（ガラテヤ一・十六）そのとき、パウロは「誰でもキリストの内にあるならば、それは新しい創造である。古いものは過ぎ去った。見よ、新しく成った」（コリントⅡ五・十七）と歓喜したのです。

ここで注目すべき一点は、彼が律法主義的自我（自力）を徹底的に放棄せしめられたこと、つまり、それは「古いものは過ぎ去った」という徹底的な（自己否定）が起こったことです。そして、それは同時に、（キリストでの自己肯定）つまり、「見よ！ 自己の存在すべてが新しく（上から聖霊によつて）創造された」ということでもある。この一点はとても大切なことです。まさに、パウロは新生（上からの霊によつて）したのです。

「新生」とは自己の存在の根柢に開眼したという意味での（本来の人間に成った）ということであつて、（特別に清い人間に成った）ということではありません。つまり、そのままの自分がそのままで、創造的な大いなる命に包まれ（エン・クリストオ）生かされているという神の一方的な恵みへの開眼ということですから。それをパウロは（信仰による義）と言表しました。

★ パウロによる（信仰による義）とは、「律法による義」に対して用いられ言表されたものであつて、ヘブライ的ユダヤ教的贖罪思想を前提にした言表だと思ひます。

では、パウロをして徹底的な自己否定（肉的自我の滅却）をもたらし、霊的自己（新生）へ導いたのは何だったのでしようか。言うまでもなく「聖霊」の働きです。以下は、「聖霊の働き」をパウロの書簡から聞き出してみましょう。

それにしても、一体「聖霊・霊」とは何なのでしようか。ここで「霊について探究」しようとは思ひません。ここでの中心は、（パウロに於ける霊の働きを見る）ということですから。

「霊・聖霊」について先に述べましたように物象化的錯視をしてはなりません。つまり「霊」

という個物が何処かに固定的にあるという（モノ）ではなく、それは（コト）つまり出来コトです。ですからイエスはユダヤ教の教師ニコデモに次のように証示された。

人は新たに（上から）生まれなければ、神の支配に開眼することは出来ない。…肉から生まれるものは肉である。霊から生まれるものは霊である。「あなた方は新たに（上から）生まれねばならない」とあなた方に言ったことに、驚いてはならない。

風（ブネイマー・霊）は思いのままに吹くが、あなたはその音を聞く。しかし、それがどこから来てどこへ往くのかはわからない。霊から生まれるものは皆このようである」…すると、ニコデモは「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。イエスは答えて言われた。「あなたは」イスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、霊的に悟り見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。（ヨハネ三・八～十一）

神の働き（コト）としての聖霊は、誰にも見抜き知ることは出来ません。霊は神の御旨のままに働くからです。「霊」は漠然と働いているのではなく、霊は創造的な力（デユナミス）として働く（たぎる）大いなる命その（コト）なのです。ですから、ルカは「あなたがたの上に聖霊が臨まれるとき、あなたがたは力を受ける」とイエスの言葉として記しています。（使徒言行録一・八）またヨハネは「人を生かすものは霊である」と言い、（ヨハネ六・六十三）「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平安とであなたを満たし、聖霊の力によつ

て希望に満ちあふれさせてくださいますように」「異邦人を神に従わせるためにわたしの言葉と行いを通して、また、しるしの不思議の力、神の霊の力によって働かれました」とパウロは語っています。(ロマ十五・十三、十九)さらに、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは告白出来ない」と言います。そして、「(霊)の働きは智慧の言葉、知識の言葉、真つ当な信仰、霊の善悪を見分ける力、解釈する力である」とパウロは言いました。(コリント一・二三)

つまり、「聖霊・霊」とは霊的世界を洞察する智慧(ソフィア)であり、創造するその機動力(デュナミス)としての働き(コト)なのです。つまり(モノ)は見えます。言葉で語れます。しかし霊は見えず、言葉出来ず「何処から来て、何処へ行くかは分からない」一方的な神の恵みとしての創造的な命のたぎりなのです。ですから「霊から生まれる者」も(天の然らしむるところを、自ずから然る)即ち、天然自然なのであって、宗教性一般に於いて見られるとおりに聖書に於いても不可思議(神秘的)な創造力である「霊の働き」こそが、キリスト教の宗教性の核であり中心的な(コト)であると言えます。ですからイエスはニコデモに対して「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか」と驚きと不審をもって語られた。この宗教性の核であり中心的な(霊的なコト)についてイエスは「神の支配」と証示なさいました。そして次のような譬えを用いて示されました。

神の支配とは、人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、

次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速人が鎌を入れる。収穫の時が来たからである。(マルコ四・二十六～二十九)

まさに、霊の創造的な力は驚愕すべき一方的な恵みであり、愛である。ですから、この宗教性(霊性)に開眼せず、また、欠落したままで宗教を論じたり、信仰を語ったりするならば、それは厳密な意味で(宗教)とは言えない。また、もし、真の意味で霊性(宗教性)を欠落した形だけの教会(牧師や祭司)等があるならば、それはイエスが当時の神殿(祭司)を弾劾したのと同じことになるのではないかと自省しています。

禍いだ！律法学者とファリサイ人よ。おまえたちは、人々の前で天国の扉を鍵で閉じてしまうのだ。なんと、お前たちは自ら入ることもせず、入ろうとする者たちをも入らせない。

禍いだ！律法学者とファリサイ人よ。偽善者どもよ。お前たちは海と大陸とを駆けめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまくいったときには、彼らをお前たちに倍するほどの地獄の子にしてしまうのだ。

彼らは、盲人を導く盲人の道案内どもだ！盲人が盲人の道案内をするなら、二人とも穴に落ち込んでしまうであろう。(マタイ十五・十四、二十三・十三)

★ イエスが言われる「偽善者」とは、嘘つきとか二重人格者、というよりも、真に靈性に目覚めないままで、単なる自我（肉）で聖書を理解し文字面で解説し、倫理規範として説く（宗教風教師）のことを指します。

靈とは、靈の働きであり、それは創造的に働く命、神の智慧の起動力（デユナミス）である、と申しましたが、具体的には次のパウロの証示に耳をかたむけてみましょう。

わたしたちは、信仰の成熟した人たちの間では知恵を語ります。それは、この世の智恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者達の智恵でもありません。わたしが語るのは、隠されていた、神秘としての神の智慧であり、∴神が（靈）によってそのことを明らかに示してくださいました。（靈）は一切のことを、神の深みさえも究めます。∴神の靈以外に神の事を知る者はいません。わたしたちは、世の靈ではなく、神からの靈を受けました。それで私たちは、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、私たちがこれについて語るのも、人の智恵に教えられた言葉によるのではなく、（靈）に教えられた言表によつています。つまり、靈的なものによつて靈的な事を説明するのです。血肉（自我だけ）の人は神の靈に属する事柄を受入れません。その人にとつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈によつて初めて判断できるからです。靈の人は一切を判断しますが、その人自身は誰からも判断（理解）されることはありません。（コリント一・六〇十五）

「靈を受ける」とか「靈によつて語る」とかいう場合、何か日常とは異なつた精神状態になり、異常なしぐさで（例えば神がかりになつて）語るように想像しますが、それは靈的な智慧力であると言えます。一言でいえば、神から与えられているが、この世の知恵では理解出来ず隠れているその神の賜物を、認識出来る靈的智慧力が靈性だと言えましょう。と言うことは、靈を受けるということは、靈的体験に於いて歪んだ自我（肉の自我）が真つ当な自我（知性）を回復することです。それこそが先に述べた「回心・メタノイア」なのです。何か清い人間になるのではなく、本来の人間になるといふことです。

★「歪んだ自我」とは、我（自我）を押し立て、その我知・我欲によつて自分の人生を生きようとする自我の在り方。それは、一見、誠実な生き方のように見えるが、エゴイズムの固まりであつて、葛藤と不安と自尊と攻撃性だけが自我を呪縛し、最後はニヒリズムに落ち込む。まさに世俗的肉人間の姿。

★「真つ当な自我」とは、我われという者が、我を超えた大いなる命に、我の善悪そのまま包まれ、恵まれ、生かされている真実に気づき、ただ感謝して置かれたところで淡々と生き抜く自我の在り方。それは、「罪人にして同時に義人」（ルター）として、そのままの自我を生きる自然人となる。その真実をイエスは証示し、その命にパウロは開眼した。

★ 靈の働きについて、パウロ自身は「異言」を語ったり「第三の天に上った」という宗教学でいう「憑依現象」や「脱魂現象」に類することを語っていますが、それを決して表面に出さず、その事自体を信仰の根拠とはしません。

ここで、大切なことを申し添えておきます。それは、真に靈的な回心をしないままで、聖書の言葉を単なる自我で、神の言葉、真理の言葉だと信じ込み、その言葉をキリスト教の教義に基づいて熱心に解きあかすことで、神の言葉を語っていると思ひ、それを信仰だと思ひ違いをしている教会人がおられるということです。それは単に肉の人の延長線上の人にすぎません。どれだけの聖書の知識を身に付け、この世の宗教組織の認可を得ていたとしても、それはただの宗教風の人です。パウロはそのような自分を、靈的啓示によって完全に破壊されたのです。つまり徹底的に自己否定させられたのです。そのことをパウロはローマの信徒への手紙七章で厳しく告白しています。ここでは、紙面の都合でとり上げませんが、彼の告白を聞いてくださることをお勧めいたします。

律法主義的宗教風自我信仰人の祭司やフアリサイ派の人達のことをパウロは、回心以前の〈歪んだ自我〉の自分の求道を思い浮かべながら、彼らのために次のように愛と祈りをもつて語っています。

兄弟たち、彼らが本当に救われることを心から願ひ、彼らのために祈っています。わたしは彼らが神に対して情熱を抱いていることは証しますが、それは、正しい認識（真に靈的智恵と力とに促されたもの）に基づくものではありません。なぜなら、神の義（神の靈的智恵力）を知らず、自分の義（ただの自我が作り上げた人間の正しさ）を求めようとして、神の本当の義に開眼し促されたものでなかったからです。（ロマ十・一〜四）

こう言う宗教風（キリスト教風）の信仰の人は、ヒューマニズム的善行や愛、または寛容や自己犠牲の徳目を説くことによって安心する傾向があるのではないかと思ひます。ヒューマニズムは大切です。あらゆる善行は尊いことです。赦も寛容も愛も謙虚も大切なことです。しかし、イエスに於いて、パウロに於いては、それは第一の事ではなく、靈的な智恵と力から自然に、しかも個々の置かれた立場に於いて自然に派生してくる第二の事柄であつて（一律に為さねばならない当為）として命じられる事柄ではない、ことをハッキリと知つておかなければ、キリスト者は（ただのお人好し）に成つてしまうのではないでしょう。そのような教会集団は靈性の欠落した（道徳的、理想主義的ヒューマニスト集団）（情緒的に互いに慰め合う集団）になるだけではないかと思ひますが？

キリスト教会は創造的な大いなる命である靈性によつて生み出され、その靈性による人間の魂の救済を証しし、告知し、その命に共に与り分かち合い讚美する働きの場なのです。そこに（教会）が出現するのです。この信仰的自覚が欠落しているところに、今日のキリスト教会の問題

の根源があるのではと思います。つまり、神による徹底的な自己否定がなままで、単に名目的な信仰による自己肯定がなされているのではないかと危惧します。その実体は「自己満足集団」となります。「教会」が「非教会化」しつつあるのが、今日の日本の教会の現状だとすれば、その問題の根源はどこにあるのでしょうか。ここに「伝道者パウロの願い」を一緒に学び、己の求道を深く自省したいと思うのです。

最後に、次回の学びとの関連で、信仰による自由人となつたパウロの「おおらかさ」と福音宣教への「伝道者パウロの峻厳さ」とを彷彿と感じさせる彼の書簡の一節を一緒に読み、この項の終わりといたします。

私はだれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を救い取るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりませんでした。ユダヤ人を救い取るためです。律法に支配されている人に対しては、私自身はそうでないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を救い取るためです。また、私は神の律法を持っていないわけではなく、キリスト（大いなる命）に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を救い取るためです。弱い人に対しては弱い人のようになりました。弱い人を救い取るためです。すべての人に対しては、すべてのものになりました。なんとかして何人かでも救い取るためです。福音のためなら、私はどんな事でもします。それは、私が福音に共にあずかるためです。（コリントⅠ九・十九〜二

★ 次号では「パウロは何を証示したのか」を学び、二十一世紀に於けるキリスト者の求道と教会の在り方を一緒に考えてみましょう。